



Title	懷徳堂創設期の人々：三宅石庵と中井鰯庵
Author(s)	大月, 明
Citation	懷徳. 1962, 33, p. 28-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90374
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷德堂創設期の人々

——三宅石庵と中井斂庵——

大 月 明

(堂友會員大阪市大講師)

一

『浪華百事談』(明治廿五—廿八年撰)は、「大阪市に於て學校と唱ふるは、船場通書町(方今北濱通と稱する、土佐堀南畔一丁半)心齋橋筋の東北側に、懷德書院(世俗中學校と云)とよべる學校ある而已にて、其余は市中書家(てらや又寺子屋と云)なり、」と江戸時代の懷德堂の存在を傳えているが、上田秋成は、その隨筆『膽大小心録』(文化五年。「新燕石十種」本により、岩波版で一、二修正)で、懷德堂をさして「大阪の學校とは潛上な名目、郷校でも過た事よ、費舎と云があたり前じや、」と毒舌を展開させつつ、「開師三宅石庵は王陽明の風な學士じやが、篤實で心切でよかつた故、富豪の者がよつて費舎をたててすました事じや、京の人で、もと俳諧士じやげな、」と往時を傳えた。

元祿十三・四年頃から大阪で町人層に儒學を講じた三宅石庵が、享保十一年、官許學問所となつた懷德堂を主宰して、以來明治二年閉鎖されるまでの堂の歴史は、『學問所建立記錄』その他の舊記類・西村時彦『懷德堂考』をはじめめとして、『大阪市史』・『東區史』・大阪大學『懷德堂の過去と現在』などに詳しく、さらに付加するものもないように思われる。然し、たとえば近世懷德堂の歴史をふりかえつてみても、幕藩體制下の經濟・文化をリードしていた大阪の漢學塾として、石庵、中井斂庵、五井蘭洲、中井竹山・履軒らの學問・教育から、幾人かの俊才を生み、混沌

社や平野含翠堂らとともに、町人による町人文化の育生と發展に重要な存在となつていた事實を、近世日本儒學のもつ社會的・教育的機能、とくに町人層の儒學思想受容の際にみられる意識と行動、さらに國學・佛教などとの對抗を軸として、廣く町人層一般に入りこんでいく儒學思想といわゆる町人意識との關連など（基本的には近世日本儒學の歴史的性格の究明にあるといえるが）、いくつかのアプローチによつて究明していくことは、今後に残された問題といえるのである。この小論は、それらについての解決を示そうとするものではないが、そうした問題意識の存在を前提として、とくに懷德堂創設期の人々の中から、石庵と中井楚庵をとりあげ、簡單ではあるがその一面をうかがつてみようとするもので、大方のご叱正をお願いしたい。ただ以下述べる所が、かつて發表した論稿と重複する點のあることを、豫めお断りしておきたい。

一一

寛文五年正月十九日、京都三條通に生れた三宅石庵は、苦しい家計の中から勉學を續け、のち弟觀瀾と江戸に出て儒學を講ずること數年、元祿十年京都へ歸り、ついで讃岐金比羅にいたること四年で大阪へ歸り、朱子學をもつて儒學を講ずるようになった。尼崎町二丁目御靈筋で始めて弟子を迎えたというが、ここに懷德堂創設の前身が始まつたのである。石庵が歸洛した元祿十年頃から、享保十一年懷德堂が官許學問所となる頃までの約卅年間、ほぼその大半を大阪における儒學教育に専念したのであるが、この間儒學界は、古學派の搥頭を中心として、朱子學では崎門・木門・林家の角逐があり、陽明學派もいぜんその存在を示していたのである。紀州時代から、「學文は孔子の道計にも不限、數の書物を見るべし」（『紀州政事草』）として、學派の別などにも拘泥しなかつた徳川吉宗が、實用の具としての儒學教育の利用を重視してとつた、文教政策の影響もあつて、儒者はそれぞれ多くの門弟を有し、門戸を張つて互に學風を競いあつていたのである。とくに、吉宗の儒學による庶民撫育の施策が、『六諭衍義大意』の出版（享保六年）を始

めとして強調されたこと、私塾の保護が行れたことなどは、儒學界の一見はなばなしい展開の理由となつたのである。これらの事情を背景として、石庵や瑩庵の大阪における仕事をみていかねばならないのはいうまでもないが、まず石庵の學問・思想の基本態度がどういふものであつたかを考えてみよう。

石庵について、『文苑遺談』は諸家人物志を引き「石庵亦以『文學』鳴世」とし、『耆舊得聞』は中村良直雜記を引いて「(石庵)經學ヲヨクス詩文ハアマリ不宜物ノ考ナトアツハレノ由榮利ヲカマハヌユヘ引コミ居ル也」と評している。どちらかといえば後者の評に妥當するものが多いようであるが、それも「爲人謙和質朴、能容人、而只諱以人道、導以教學、毫不說他事。」(『近世叢語』)といつた態度・方法に支えられたものであつた。この石庵の學問・思想の内容あるいは態度についての世人の評價が、「三宅石庵ノ學問ヲ俗間ニヌエ學問ト云ヘリ其言ニ云ヘリ頭ハ朱子尾ハ陽明其鳴ク聲仁齋ニ似タリ象山ノアタリヲカケマハルト香川太冲ノ語リケルナリ」(『文會雜記』)という表現である。この評は、表現としては實は妥當性を缺くものではなかつた。たとえば仁齋學との關係は、石庵の「中庸錯簡說」からうかがえるし、朱子學・陽明學との關係については五井蘭洲の『蘭洲遺稿』が、正徳末頃から石庵が陸王學を唱えたとする一方、石庵について、「未嘗聞一語及朱陸異同、況一之乎、余少時嘗聞宅子講經、未嘗援陸攻朱、衆所識」と述べていることから、その一斑が知られるのであり、そうした現象から歸納していけば、太冲の語つたことも前述のように妥當性を缺いたものとはいえないことになる。然しながら問題は、石庵がいかなる態度で各學說に接近し、いかなる方法でその成果を攝取し、自己の學問・思想にいかにか寄與させているかである。さらに考察を進めてみよう。

石庵の學問・思想において、中心的な位置をしめるのはやはり朱子學的傾向であろう。ただ朱子學も陽明學も、いわば自己修養の手段であり、自修こそ學問終局の目的であるという點は、強固に守られているのである。即ち、「朱陸王子は皆吾道の宗子、斯文の大家なり。世の朱を爲るもの、陸を非とし、その王を爲るものは、又朱を是ならずと

して各々之れを壓倒せんとするの氣あり。是れ三先生の心を知らざるなり。」とする石庵にとつて、「議論の間合はざることありと雖も、並び行はれて相害せざりき。之れを君子といふ。その學は天下の公なり。然れば朱に本づく、王に本づく、本づく所異なりと雖も、その私たるは一なり。」(『書藤樹先生書簡雜著端』)との確信があるのである。そうして「私たるは一なり」とする境致を完成させるためには、仁齋學・陽明學、あるいは朱子學攝取による、より確固たる道が選ばれたのである。「中庸錯簡說」にしても、仁齋の行つたきびしい文獻批判と、それにもとづく自己の學說體系樹立といった態度はうかがえないが、錯簡を正す意圖が、中庸に示された誠の意を一貫させようとするためであつたことを思わねばならず、誠を貫徹して自修の道を進めようとする所に生れた成果の一つともいえるのである。もちろん、石庵の數少い遺書の中から、その内容を考へてみた結果、理論・體系を論ずる以前の姿勢が、石庵の思想一般、あるいは學問への態度にみられるのであり、並列された學說を自修の道の前に容認して、ただ私たるは一、あるいは「三先生の道とする所は何ぞ。此私に勝ちて天下と大同するのみ」(同前)を願つてゐることを認めねばならない。あくまでも石庵の求めた道は、學說間の論争や、自己の學說體系の樹立ではなく、私たるは一なりとする自修の道であり、誠の強調であつて、そのためには、雜駁不純といわれようとも、唯一の教義墨守に走らない、いわば合理的ともいえる主張・態度をとつたのである。上田秋成の印象的批判ともいえる「三宅石庵は王陽明の風な學士じやが、篤實で心切で」の言も、別に陽明學派の人であつたというのではなく、知行合一を尊ぶ長者風の印象を傳へ稱したのであらうが、そのことも石庵のもつイメージを明かにする一事であらう。

石庵が始めて大阪で塾を開いた頃、中村良齋、富永芳春、長崎克之、木村平十郎らが入門、正徳三年には弟子の諸同志が掛銀をして安土町二丁目に多松堂を建て、その後享保四年に高麗橋筋三丁目にうつる頃には、吉田可久、山中宗古が入門、のちの懷德堂創設の五同志がそろつた。享保九年の大火で屋敷・書籍を焼亡した石庵は平野郷へ移り、同所に居住するうち、中村ら諸同志が申合せ、尼崎町一丁目北側富永芳春隱居屋敷の焼跡に講舍懷德堂を建て、同年

十一月から石庵はこゝへ歸つて講義を始めるのであり、やがてこの懷德堂が官許學問所となるのである。これよりさき正徳元年頃、石庵門に入つてきたのが中井梵庵である。

三

元祿六年九月廿九日、播州龍野に生れた梵庵は、寶永三年十四歳の時、父らと大阪へ出て一時は他家の養子となつたが、養父の死後再び實家へ歸り、正徳元年十九歳以降以降と思われるが、石庵門へ入つたのである。正徳三年父に従つて龍野へ歸り、藤江熊陽（仁齋門）についたが、以後攝播の間を往來して石庵に師事した。懷德堂を官許學問所とするには、町人五同志らとともにもつとも盡力し、このことに消極的であつた石庵を押立て、大島古心・三輪執齋らの援助をえて、官許學問所とするのに成功した中心人物であつた。この梵庵も石庵と同様、家計の苦しさから養子に出るなどの苦勞をしているが、苦しい環境から、一身を立てるのに儒者の道を選んだのである。とくに享保元年廿四歳の時、弟が赤穂で醫業を開いて父がそこに隱居し、母を大阪に迎えるようになってからは、彼は儒者への道を一途に進むようになったようである。梵庵は、疑問の點は残るが、江戸で三宅觀瀾、室鳩巢、大阪では五井持軒・蘭洲、播州では藤江熊陽、梁田蛻巖、京都では三輪執齋、三宅尙齋、伊藤東涯にも教えをうけたともいう。石庵と同様、元祿―享保期の儒學界の展開の中で、各學派についての知識をうる機會をもつていたのであり、享保元年以降、家庭の一應の安定によつて梵庵が自己の進む道に専念できるようになつたと考えると、とくに享保期を中心とした儒學各派の展開と對立の中で、師石庵の教授を軸とした學習をつづけたのである。もつとも、享保期を頂點とする儒學各學派の展開も、その内容からみると、理論面が後退し、經學・文章學・經濟學に中心が移る、いわば頽廢期に入つていくのだといえなくはないし、石庵においてもその傾向なしとしなかつた。従つて石庵や梵庵は、一つの轉回期にあつたともいえる儒學界の動きの中で、研究・講義を行い、思索していたといえるのである。

それでは、麓庵の學問・思想にもつとも強い影響を與えたのは誰かといえば、やはり石庵をあげるべきであろう。その關係は、石庵が中江藤樹に關心を寄せたように、麓庵もまた熊澤蕃山に關心をもち、『息遊先生事狀』をかき、「(蕃山) 兼崇朱子。其心術議論。據以爲說。不爲不多。」と述べているといった近似以上のものがあつたのである。

即ち、麓庵の傾向を簡単にいえば、子の竹山が述べたように、朱子學を中心とし、坦平簡易な家事日用之間にある孝弟忠信を強く説いた所にあるといえる。つまり、自修の道・誠の意を強調し、各學說をそこに集中同化しようとした石庵を受繼ぎ、麓庵もまた空理空論にあらざる、家事日用之間にあつて人として守るべき徳目、とくに孝弟の徳目を押立てて誠の意を強調したのである。この師弟に共通する傾向は、たんに個人の性格にのみ歸せられるものではなく、たとえば懷德堂において、大阪の町人層を主とした受講者達に對し、兩者が儒學による教育・指導を行つていく過程での、彼らの反應と期待への對應といつた要素も考えられねばならないであろう。それでは町人層の反應と期待の主なものが何であつたかといえば、それは、主人としてはその恩に對する奉公人の孝を強調する期待であつたろうし、始末を第一義とし、知足安分の精神を至上のものとする町人層にとつては、それを安定させる教訓・指導への期待と要望でもあつたろう。従つて、石庵・麓庵が、邪心をさり誠をつくすという普遍的な道徳理念から、さらに親に對する子としての誠をつくすことが孝であり、また子としてなすべき孝をつくすことが、人として子としての誠をつくすことになるのだと説くことには、強い共感と賛意を示したのであろうし、石庵や麓庵の教授内容や自説の展開と強化に、反映されていつたといえよう。とくに享保期以降、孝が親子間の倫理、即ち子の親に對する物質的乃至は精神的奉養の面に局限されていく状態とあいまつて、孝についての説話自體、孝の觀念が條件的主體者的な面をもつことより、無條件的な恭順を子に求めることがむしろその義務の内容である、と説くようになってきたという事情が示すように、家族的身分構成と家族的連帶感とを基盤とする、商家における主人と奉公人との關係も親子間の關係と同様、新しい事情に直面して緊張していたのである。それだけに前述したような要素は重要であつたろう。とくに麓庵は、石庵の

消極的な態度とは逆に、幕府の文教政策にも積極的に對應し、懷德堂を官許學問所としたのちも擴張につとめ、享保十五年七月十六日石庵歿後は、學主兼學問所預人となり、寶曆八年六月十七日に歿するまで、奉行所關係・代地問題・堂舎改築その他、堂經營に努力したのであつて、それらのことも、家事日用之間にある簡易な徳目の強調に結びつくものと考えられよう。そうした強調にプラスしたのが、瑩庵の『とばずがたり』・『五孝子傳』などの著述、及びその出版であり、懷德堂における教授に加重された効果をあげたであらう。ともあれ、石庵・瑩庵にみられる共通點、そうして、この共通點とそれぞれに異つた實社會への對應の仕方、との關連について、以上のように理解したいのである。

(石庵)
「宅子音吐不朗暢、口中糊塗、且性不好講書、唯坐談、」(『蘭洲遺稿』)といわれ、また著書を好まなかつたという石庵は、享保九年の大火で著述その他を焼いてしまつたであらうし、歿後は安永元年の盜難でさらに遺書を失つてしまつてゐる。瑩庵も同じく、「常主踐履不事詞章。故皆未脫稿。」(『先君子貽範先生行狀』)といわれるように遺書は多いとはいえない。吉田銳雄氏が苦心博搜された結果が、「石庵先生遺稿」・「瑩庵先生遺稿」として、かつて『懷德』に收められてはいるが、それ以外に索めえたものを加えても、兩者とも(とくに石庵)に少ない。従つて、兩者の學問・思想の内容を十分に整理して指摘することは難かしい。然し、少ない資料からではあるが、中心となる諸點は大體以上に述べたように考えてよいと思う。次節においては、以上述べてきた所に付加して、さらに兩者について述べてみよう。

四

「然れども佛學陽明は必ずわるく、朱子でなければならぬとばかり心得候は、例の儒者形氣、手前の馴れし事、得し方へ歸する我執にて候、」(『答問書』)とする梁田蛻巖が、「聖道固無以尚焉、然佛理亦可嘉矣、」と述べたのに對して、瑩庵が「不然、是二本也、」(『續近世叢語』)と否定したというが、儒學、就中朱子學を基盤として、孝弟の

徳目を押立て、誠を強調した楚庵の理念は、前述のように、石庵の思想の中核を繼承したものであつた、竹山（積善）・履軒（積徳）の二子をもつた楚庵の歿後、その遺書によつて石庵の子春樓が、懷徳堂の學主となつてゐることは、學主の世襲を禁じた定約に従つたものであり、楚庵の師石庵に對する禮を示すものといえるが、楚庵にとつて、石庵の思想あるいは學問への態度が、非常に大きな重みで楚庵に繼承されていることを示しているといつてもよからう。

石庵・楚庵のもつていた特色は、その後、竹山の「學術ハ申上候迄モナク朱學ノ外ハコレナキ事ニテ候……但シ宋季元明ヨリ吾邦先輩ニ至リ經說文義ナドニ於テ各見所アリテ舊說ヲ守ラザルモ多ク互ニ得失長短モアリ實ニ前賢未發ノ旨ヲウルモアルベケレバ參考ニ備ヘ疑フベキヲ闕テソノ從フベキニ從ツテ可ナリ……全體ノ所程朱ヲハナレタルハミナ邪逕曲蹊ト思シ召ルベク候」（『竹山國字讀』）といつた主張や、「履軒與人話。及民間孝子順孫事狀。動容稱贊。如癡如愚。不似平生豪邁。竹山亦然。」（『在津記事』）といわれ、また履軒によつて「中庸」の誠が改めて強調されたことなどへと系譜的にもつながつていくのである。

ただ石庵・楚庵の教授・指導に對する反應、あるいは町人層への教育效果などを直接確かめることのできる資料はない。然し、たとえば楚庵が『とはずがたり』で、「あき人の、をのれらは利をわざとするものなれば、ものまなひしても、清き心ぞなしがたしといふ、あさましき論也、もの滯らす、たよりよくなりもてくるか利なれば、たれか之をあししといはん」と商行爲を擁護し、「よつの民の、をのれをのれそのくらゐをのがれて、かれこそよけれ、これこそねがはしけれとて、うつりかはる、大やうなし得たる、まれなり」と生得の身分の枠内に留るべき、知足安分の精神を説く一方、『五孝子傳』や『とはずがたり』において、孝の觀念を強調して上長者への絶對的な奉仕を説いて、父の身代りに我命をすてようとする子、我子を失つても姑を見守り續けねばならぬとする寡婦、兄が罪をえて死んだため、おしつんぼの弟が父母のために命を思つてか自殺した話など、孝を奉仕する側の一方的な行爲が賞讃されている。世襲的觀念だけでは孝の觀念を裏づけえない情勢の變化の中で、こうした甚だ觀念的な孝、そして誠の強調が

繰返されているのであるが、これらの内容が、一方的に塾庵の側からもちだされているのではなく、やはり、町人層を中心とした受講者の側の要望に合致するものであつたのだ、としてもまちがいはなからう。懷德堂も幕末になると武士がふえてきたといわれるが、始めの頃も町人に交つて武士が参加したであらうし、官許學問所となつてからは、大阪町奉行及び奉行所との關係も強くなつていたやうで、懷德堂受講者を町人だけであつたとはもちろんいえないのである。然しながら、孝弟の徳目・誠の強調は、本來、絶對服従の精神を強く要求され、享保期以降は、絶對服従の教説が政治的にも必要となつてきていた武士層にとつてもまた、そのまま十分に通用するものであつたのである。

町人層の要望には、以上しばしば述べてきた範圍にのみ限られたものばかりでなく、多様なものがあつたやう。

(石庵)

「今橋の學問所、萬年先生の時は、さして學問をさすではなしに、むすこを先あづけて、よい事をすこしでも聞す事のみ、又金つかひになりおると、さそく預けて置所也、先生かたく出さず、多葉粉盆のさうじ、茶のさうじ、羽織きせづにつかはれたで、心はつい改る事じやつた、」(『膽大小心録』)という記述も、町人達の要望の重要な一部を語っているのであり、ここでは石庵が、自修の道とともに語りあうことで、若い町人達の所行を改めようとしている想像もできるのである。また懷德堂としても、『懷德堂定約』(享保廿年)に、「士農工商醫家それ〳〵の家業を考へ、教かた可有歟、學者醫者之子ならば讀書を第一と致、農工商之子弟たる者は、手習算術家業入用先務と存候、」と規定したのも、當然なことであつたやうが、この定約で、「四書五經其外道義之書講談致し、他之雜事講し候儀一切無用」としていたのが、『懷德堂定約附記』(寶曆八年)では、「餘力に詩賦文章或は醫術をも、心懸候人へ内證にて講し聞せ、或は會讀にいたし、或は詩會文會等致候事は、格別之義と存候、萬年も内證にて醫書詩集等講し聞せ候事も有之候、但表向之講談に致間敷事は、定約之通可爲勿論候、」となつていることも、懷德堂の側の對應を語っているものといえよう。とくに石庵が、内證にはあつたが、醫書詩集などを講じてやつていたということは、石庵の合理的な教授の仕方を示す一例として興味がある。こうした仕方に反感や反對がないわけではない。たとえば『蘭洲遺稿』は、

「萬年潛賣藥、家頗饒……宅子學無宗旨、賣藥以爲業、喜談醫、」と苦言を述べているが、その『蘭洲遺稿』に次のような記述がある。「先人門人、長崎克之、中村莊、富永吉、平野新、加藤源、皆從宅子、今西正立獨守舊業、憤曰、萬年設術奪我先生門人、」というのである。西村時彦氏は、この事情を、持軒と石庵の性格の差、及び兩者の塾へ通う町人達の通學の便から解釋されたが、さらに歩を進めて、「眞古人也」と評され、觀念的・非世間的な意識と、四書以外の他に及ばないリゴリスチックな方法とをもつた持軒と、前述した所に明かな石庵の態度とを比較してみるとが必要であろう。そうした町人層の石庵門への参加、石庵を忠實に繼承していつた麓庵の存在が、苦心はあつたであらうが、町人層の援助による懷德堂創設の一因となつたであらうし、逆にまた、石庵・麓庵の學問・思想の性格形成に、重要な因子となつて働いていたといえるのである。

享保十一年十月、懷德堂玄關にかけられた壁署の第一條、「學問者忠孝を盡し職業を勤むる等の上に有之事にて候、講釋も唯右の趣を説すむる義第一に候へは、書物不持人も聽聞くるしかるましく候事、」（『懷德堂内事記』）は、懷德堂創設期の人々の、近世儒學に對する要望であり、石庵・麓庵の學問・思想の中から要約された、答えの一つであつたといえよう。

（付記）

本稿においては、懷德堂關係の記録・文書その他、使用すべき資料で用いえなかつたものが多い。それらを含めた考察が必要ではあるが、本稿では、主として石庵・麓庵に即した資料を中心とした。尙、註記は、紙數の關係もあり、簡単にさせて頂いたが、参考文献についても一々あげなかつた。それらの點、また石庵・麓庵、それぞれの考察については、次の拙稿を参照して頂ければ幸いである。「三宅石庵とその思想—大阪懷德堂史の一齣—」（『京都大學讀史會國史論集』）・「中井麓庵論」「同補訂」（『人文研究』十の十、十一の九）・「五井持軒の學問と思想に關する若干の考察」（『ヒストリア』第廿八號）